

NO.1

大迫地区担当 鈴木寛太さん（東京都出身）

「ぶどう栽培」で地域を盛り上げ

大迫と都市部の若者をつなぎたい。



（右上、右下）デスクは花巻市役所の大迫総合支所内にあり、事務作業や打ち合はここで行う。（中上、中下、左）大迫のぶどう農家のみなさんとぶどうづくり隊。



大迫に来てよかったこと

- ・農家さんに感謝されると「自分のいる意味」を実感できてうれしいです。
- ・お祭りに参加させてもらったこと。東京のお祭りは、こんなに地域全体で盛り上がるのがないので。仕事以外の人脈も広がりました。
- ・地元のちんどん屋「早池峰一座」の仲間入りをしたこと。最初は尻込みしていたのですが、今ではノリノリです（笑）。



大迫の好きなところ

- ・大迫の人。気さくに声をかけてくれる。
- ・夜が静かで、星がとてもきれい！

鈴木隊員の「大迫暮らし」

ちょっと戸惑っているところ

- ・どこにいても声をかけられる（笑）。
- ・まだ言葉が聞き取れないことがある。
- ・冬の寒さと雪の多さ。昨シーズンは暖冬だったらしいので、次の冬が怖い。



大迫の好きな場所

- ・自宅の近くの橋からみえる景色。川があって、山があって、つべんに権現さま（展望台）の横顔が見えます。その展望台からの景色も大好きです。



生まれも育ちも東京で、両親ともに東京出身。そんな私が岩手と関わりを持ったのは、大学1年生のときです。東日本大震災の復興支援ボランティアとして訪れたことがきっかけでした。そのときに見た被災地の惨状に「少しでも力になりたい」と、岩手に通った回数は大学4年間で計7回。訪れるたびに「よく来たね」と迎えてくれるのがうれしくて、田舎を持たない私にとって岩手は「第二の地元」のような存在に。東京で行われる岩手の物産展でアルバイトもして、岩手との縁はどんどん深くなっていきました。

就職活動の時期には岩手での就職も少し考えましたが、当時の私には現実的でないように思え、都内の企業に就職。だけど周りには岩手で働いている人、仕事で岩手と関わっている人が結構いて、うらやましかった。余暇を使っただびたび岩手を訪れてはいましたが「岩手と関わりたい」気持ちほど膨らんでいきました。

そんなとき「花巻市で地域おこし協力隊を募集する」と知り、心が揺らぎました。その時まで就職して1年足らず。せっかく入った会社を辞めていいのかすごく悩みましたが、周りの応援もあり、岩手に来ることを決断。こうして2015年8月1日、イーハトーブ地域おこし協力隊1期生・大迫地域担当として着任しました。

隊員としての私の任務は、生産者の高齢化や後継者不足といった課題を抱えているぶどう農家の現状を把握し、大迫地域の特産であるぶどうの栽培をこれからも維持できるようにサポートすること。ぶどう栽培のお手伝いをするボランティア「ぶどうづくり隊」のマネジメントをはじめ、「ぶどう栽培に関わってみたい人」と「手伝ってほしい人」をつなぐ役割を担っています。隊員を募集していた4つの地域のうち大迫を選んだのは「隊員に何をしてもらいたいかが明確だったから。何よりも、東京の説明会で出会ったぶどう生産者さん、関係者のみなさんの熱意に触れ「この人たちと仕事をしたい」と思いました。

着任してまもなく1年。ぶどう栽培はもちろん、農業自体が初めての経験でしたし、地元の人の言葉もあまり聞き取れなくて（笑）、わからないことだらけ。とにかく毎日必死、無我夢中でした。ぶどう栽培を年間通じて経験しつつある今、やっと全体像が見えて来たな、というところ。大迫での暮らしも少しずつ慣れてきました。東京で生まれ育った私にとっては新鮮なことばかり。特に星空の美しさにはいつも感動しますね。ずっと眺めていても飽きません。

任期はあと2年。どこまでできるかわかりませんが、これから取り組んでいきたいのは「大迫に若い人を呼ぶ」ことです。いきなり移住、定住というのは難しいので、例えば「ぶどう畑を手伝いに行く」「誰かに会いに行く」など、若い人と大迫の接点をつくって「第二のふるさと」のように通ってくれる「しかけ」を作れたら、と考えています。私がマネジメントを担当している「ぶどうづくり隊」には高校生メンバーもいたり、県内の大学でも「大迫のぶどう栽培を支援したい！」というサークルができたりして、すごく心強い。そんな若者たちとコラボレーションしながら、大迫をより活気のあるまちにしていきたいです。

「花巻市をもっと元気なまちにしよう！」と、市内各地域で活動中の「イーハトーブ地域おこしプロジェクトチーム（地域おこし協力隊）」。

都市部から隊員として花巻に赴任し、地域のために奮闘している隊員たちをシリーズで紹介していきます。

「イーハトーブ地域おこしプロジェクト」とは？

市内各地域（花巻、大迫、石鳥谷、東和）の課題解決に新しい目線で取り組むために、主に都市地域の意欲ある人材を「協力隊員」として受け入れ、地域の一員として活動してもらうプロジェクト。任期は3年で、平成27年度から導入しています。現在、7人の隊員がそれぞれの地域に入り、中心市街地の空洞化、後継者不足による主要産業の縮小、少子高齢化や人口減少による地域の活力減退といった課題に取り組んでいます。